

かな文の読みにおける指さし方略の検討

○秋田喜代美 無藤 隆 藤岡真貴子
(立教大学) (お茶の水女子大学)

【問題】

かな文字習得初期の幼児にとって文を読み理解することは、複雑な認知処理過程である。したがってその複雑さの低減のために、自発的に何らかの補助手段や方略を使用することが考えられる。その一つは外的手段として他者に援助を求めたり、文に付随するさし絵などの文脈状況を利用することであり、もう一つは声や手など自分の身体を道具として用いるという内的手段の利用であろう。秋田・無藤・藤岡(1992教心)は、絵本の読み方を縦断的に分析する中で、文を読む際に指を指しながら文字を読み進む者が幼児の一部にみられること、読みの熟達に伴い指さしは消失する事例が多いことを示した。Ehri & Sweet(1991)は指さし方略ができるには音節分解能力を必要とすることや指さしが文の記憶を促すことを示している。だが、わが国では文字読み時における指さし方略に関する検討は行われていない。そこで本研究では、第1に指さしはどのような時に生じる方略であるのか、第2に指さしは文の理解を促すのか、第3に幼児自身は指さし方略をどのように認識しているのかを検討する。

【方法】被験者：都内幼稚園園児。年長児65名、年中児47名、年少児32名の計144名(男67名、女77名)に調査を実施し、うち絵本読み課題において文字読み反応をし、理解質問にも回答できた者83名(年長58、年中22、年少3)を分析対象とした。

課題：1) かな文の読みと理解課題 ①単文の読みと理解、②3文から成る文の読みと理解、③絵本の読みと理解(詳細は秋田・無藤・藤岡1992) 2) 指さし方略の認識に関する質問からなる。個人面接調査である。

【結果及び考察】

1 指さしの発現する時期

①課題負荷：読み課題全てに指を使用しなかった者は45名(54%)、全てに使用した者が14名(17%)、課題により使用した者が24名(29%)であった。この24名のうち、単文では使用せず3文・絵本で使用した者が18名、3文か絵本のいずれかのみで使用した者が6名であり、単文で使用し他課題で使用しなかった者はいない。ここから課題の負荷が高くなるほど使用する傾向が高くなると考えられる。

②文の読み方：かな文の読み方と指さし発現率の関連を見ると、単文では拾い読みをする者の35%、文節読みの10%、3文では、拾い読みの53%、文節読みの21%、絵本では拾

い読みの35%、文節読みの25%が指を使用しており、拾い読みに比べ文節読みの方が使用率は低い。これはかな文の読みを習得してから時期が経つにつれ指の使用が減っていくという前回の見解を支持する結果であり、読み方の熟達と共に指使用は減少していくことを示している。

③指の指し方：絵本課題で指さしを行った25名に関して、これから読むべき文字をさしてから読んだか、読み終わった所を指したか、またなぞるようにさすのか、一文字ずつポインティングしていくのかを分析した。行をなぞるようにしながら次に読むべき文字を指す者が17名、行をなぞりながら読み終わった部分を指す者が2名であり、一文字ずつポインティングしていく者が6名であり、共通した一定の指し方があるわけではない。だが、多くの者はなぞるようにしながら先の部分を指していく事から、これから読むべき所を継時的に指示する事によって注意を焦点化し情報を統合することを指さしが援助しているのではないかと推察される。

2 指さしが理解に与える影響

単文、3文、絵本課題ともに、拾い読みよりも文節読みの方が理解得点は高かったが、各読み方の中で指さしをした者としなかった者の理解得点にはいずれの場合においても有意な差はなかった。ここから指さしを行う事が文意の理解を促すという結果は得られなかった。ただし今回の分析は被験者間比較であるので、今後は指さしを行っている者に指さしを禁じた場合と自発的な使用を認めた場合、行っていない者が指さしをした場合としない場合という個人内での比較検討が必要と考えられる。

3 指さしに対する認識

指さしをする者の38%が自分が指さしをしていることを自覚していた。また指さしをした方がよいとする者は理由として「読む所を間違えなくなる、字を飛ばさない、覚えられる、おかあさんが指して読む」という説明を行った。一方、しない方がよいとする者は被験者の68%であり、それらは「指すと字や絵が見えなくなる、早く読めない、心の中で読んだ方がうれしいから、学校では指さない、指すのは下手」といった説明をしていた。

いかにして自分一人で文字情報を読めるようになっていくのか、指さし方略とあわせて様々な方略や社会的援助の存在やその発現時期と機能の検討が今後必要と考えられる。